

秘境の隠し金山跡
ゴールドパーク鳴海

編集部：Mt.1

目次

1. 施設データ
2. バックグラウンド
- [3. アプローチ](#)
- [4. 黄金坑](#)
- [5. 大切坑](#)
- [6. まとめ](#)

1. 施設データ

所在地：新潟県岩船郡朝日村大字高値字駒ヶ岳国有林143林班ろ
開設年：平成6年
観覧所要時間：約1時間
開館日及び閉館時間：6～11月の土・日曜日と祝日、9：00～16：00（12～5月は積雪のため閉鎖）
駐車場：乗用車約10台
年間入場客数：12,000人（ピーク時）
交通：北陸自動車道「新潟西IC」から車で180分
料金：入場料／大人600円、子供（中学生まで）300円、砂金採取体験／200円
問い合わせ：朝日村役場商工観光課 Tel0254-72-0111
取材日：2000年10月

所在マップ



2. バックグラウンド

「鳴海金山」は、山形県境に近い、高根山峰に連なる、駒ヶ岳（776m）のほぼ山頂近くに位置する。その歴史は佐渡金山より古い。大同2年（807年）の発見から江戸幕

府末期まで採掘が続いた。上杉氏の領地であった天正から慶長のころには、全国一の産金量を誇り、慶長2年（1596年）に、全国の領主から秀吉のもとに献上された黄金の3分の1を占めていたとの史実がある。

採掘が終わった明治以降、自然に帰るがままの状態だったが、平成6年に朝日村が事業費3億6千万円をかけ、観光坑道「ゴールドパーク鳴海」として整備したことで、およそ100年ぶりに、一般の“入坑”が可能になったのである。

観光と銘打っているが、実際は険しい秘境の“隠し金山”そのものである。今なお当時のタヌキ堀り（手堀り）の跡や、荒々しい岩肌がそのまま残っており、その歴史的価値から、測量を含む大学の学術調査が行われている。それでも、坑道はもちろん鉱山の全貌は明らかになっていない。

[マインパーク取材一覧へ](#)

[次ページへ](#)



3. アプローチ

他の取材の関係から、新潟市内に宿を取った。前夜は、日本海の海の幸を肴にアルコールが進み、取材班全員が恒例の二日酔いの中、早朝に出発する。まずは「朝日村役場」を目指す。実は「ゴールドパーク鳴海」は、土・日、祝日のみ営業であるが、無理を言って平日に取材をお願いしたため、同村役場観光課の職員の方が開錠を含め、現地取材に同行していただくことになっていたのである。新潟市から国道7号線を約60km北上。所要時間約1時間半、大きな渋滞もなく約束の9:30少し前に役場へ到着した。

ご挨拶を終え、須貝誠一課長をはじめ職員2名で同行していただくことになり、いよいよ出発。

筆者：「ここからどれくらいで着きますか？」

課長：「近道して行きますから、小1時間でしょう。少し山道を走りますが、クルマはどれですか？」

筆者：（ハリアーを指さし）「あれですけど...!？」

課長：「あ、だいじょうぶですね。我々のクルマについてきてください」

役場のクルマは四輪駆動の頑丈そうなパジェロである。筆者の愛車ハリアーは、二輪駆動であるが、車高が高いということから、山岳路でも大丈夫と思われたようだ。しかし、アウトローダーではない。少々不安に思いながら、先に行くパジェロを見失わないように何とかついていく。

山に向かって10分も走ると人家や田畑が見えなくなり、15分後には舗装も途絶え、砂利道に変わる。このあたりまでは、難なく追走できたが、だんだん山奥に入り、深いわだちと、大きな石がゴロゴロ、しかも左右から草、上から枝がウエスタンラリーアットしてくるようになると、山道のドライブに慣れていないハリアーはどんどん離されていく。

とにかく慎重に、約30分。同乗者が車酔いをしない程度の速さで走り続けると、少し道が広がっているところでパジェロが止まり、その横で須貝課長が山の林の中を見つめている。

筆者：「着いたんですか？」

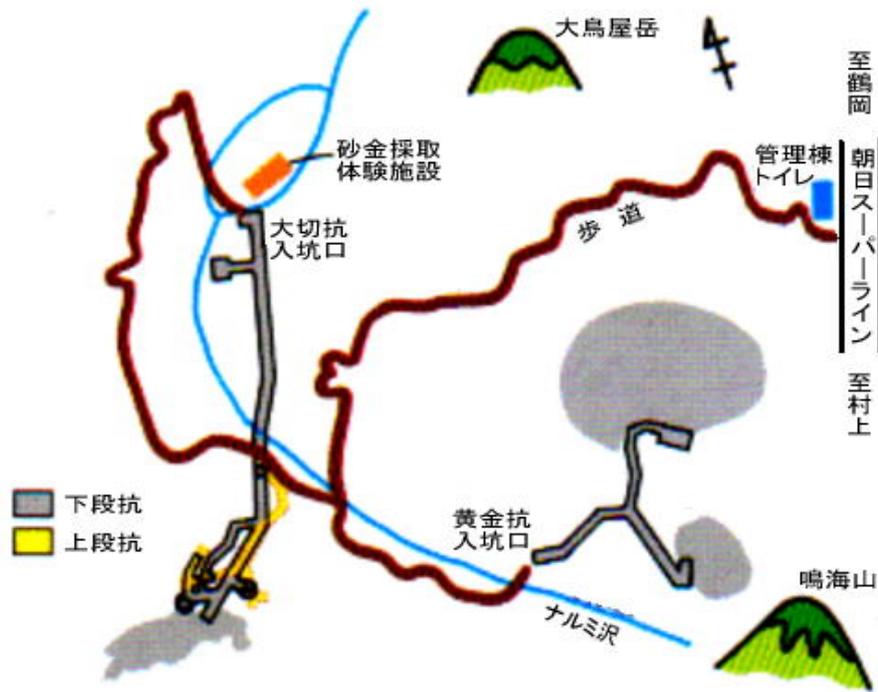
課長：「いや、シメジがでてきているか、見に行ってます。この辺は天然のキノコが豊富なんですよ」

と少し自慢気。すると道もない森の中から職員の方が出てきて「今年は遅いですね。まだ採るには小さいです。では出発します。もう少しですが、1本道だから迷わないので、ゆっくり来てください」と気を使っていた。

そのお言葉に甘えたわけではなかったが、慣れているとはいえ、ぐんぐんペースを上げるパジェロとは、みるみると車間が広がる。そして約15分後にやっとアスファルトの道「朝日スーパーライン」へ出て、そのすぐ横の駐車場へ到着した。

約1時間のサバイバル・ラリー体験で、人間以外で出会えたのは、野生のウサギ、リス、そしてサルであった。

坑道マップ



駐車場 (写真1) といっても、道路脇に10台ほどが止められるのスペースを確保しているだけだ。その横にトイレと電源室を兼ねた管理棟 (写真2) があり、すでに職員の方は発電機を回すなど、準備を進めている。建物には「ゴールドパーク鳴海」の案内看板 (写真3) が掲示してあり、坑道までの略図が書いてある。

写真1：駐車場



課長：「ここから、歩いて坑道へ向かいます」
筆者：「どのくらい歩きます？」
課長：「10分ぐらいですね」

と、建物横の「鳴海黄金坑」と書かれた碑と小さい料金徴収所のプレハブ (写真4) があり、その横の山道を入っていく。

写真2：管理棟



筆者：「えっ、まだ...」

すぐに坑道があると思っていた我々は、さっさと出発する課長たちの後をあわてて追った。

入口の小高い丘をまず登ると、次は細い山道の長い下り (写真5) になる。道中は山の自然がそのまま、都会人にはハイキング気分が味わえる。また途中にもタヌキ堀り (手堀りによる採掘方法) の跡らしき横穴 (写真6、7) がいくつかあり、徐々に雰囲気盛り上がってくる。

道はアップダウンというよりほとんどダウンで、5～6分で「黄金坑」「大切坑」の分岐点 (写真8) へ到着する。まずは「黄金坑」へ向かい、それほどの疲れも感じずに分岐点からさらに5～6分。小川を渡り、小さな休憩所 (写真9) の前に「鳴海黄金坑」と書かれた坑道への入口 (写

真10) が現れた。

写真3：坑道の案内看板



写真4：料金徴収所



写真5：細い下りの山道の横穴がある



写真6：山道の途中にもタヌキ堀



写真7：危険な穴は入れないようにしてある



写真8：山道途中の分岐点



写真9：黄金坑前の休憩所



写真10：黄金坑入坑口



[前ページへ](#)

[次ページへ](#)



4. 黄金坑

職員が鍵を開けて、早速中へ入る。入口部分は床、壁、天井ともコンクリートで整備した、ただのトンネル (写真11)。しかし先へ進むと二股に分かれ「←大千畳抗」「洗鉢場抗→」の表示 (写真12) が出てくる頃には、床以外はむき出しの岩肌になり、まさに洞窟の中を探検という感じでワクワクしてくる。まずは「大千畳抗」へ案内され、見学用に設置された階段を上る。

その両側にも、何か所も岩を削った跡があり、「自由に位置を変えて、タガネの跡などをご覧ください」と記された案内板と、取っ手が着いたスポットライト (写真13) を設置している。これは良い仕掛けで、左右しか動かないが、自分が見たい場所をじっくりと見ることができる。（「タガネ」とは、岩を削るときに使う鋼鉄製のノミのことである）

生々しい掘削の跡に驚嘆しつつ階段を上りきると、そこは約6m×3mの屋根がかけられた展望台風の広場になっている。目前に半径約10m、高さ約5mのドーム状の薄暗い空間がぽっかり出現 (写真14) し、パタパタと鳥が飛ぶような音がしている。

筆者：「この音は何ですか？何か飛んでませんか？」

課長：「コウモリですよ。ここは、“大千畳抗”と名付けられた大空間ですが、ここから、横穴がいくつも伸びていて、外につながっているものもあるらしく、そこから入ってきているらしいんです。でも、見ての通りここは崩落した跡があり、危険なので横穴がどのくらいあって、どこへ通じているのか、調査できないんですよ」

言われて、目を凝らすと黒い点がいくつも飛び交っている。

課長：「ライト付けてみましょうか。おーい、ライト付けてくれ！」

ともうひとりの職員へ声をかけた瞬間、ライトアップされた目の前の空間に、何十いや何百匹のコウモリが飛び交っている。（写真15）

筆者：「うひゃー、すごい数ですね。この床にある大きな岩全部が、崩落の跡ですか？」

写真11：入口付近はただのトンネル



写真12：坑内の分岐案内



写真13：自由に動くスポットライト



写真14：大千畳抗



写真15：わかりづらいが、黒いものがコウモリ

課長：「そうです。ここが発見されたときからこのようになってましたが、どのくらい前に崩落したのか不明です。では、その緑のボタンを押してください。レーザー光線、BGMによる“鳴海の賛歌”というライトアップショーが始まります」

言われたとおりに、ボタンを押すと、大音響のシンセサイザーのBGMにレーザー光線による光と音のイベントが始まった(写真16)。(やはり、ここでもか...)と少々ガッカリするが、単純だが、それなりに幻想的なショーは5分ほど続いた。

筆者：「すごい仕掛けですね」

課長：「そうなんです。でも、この中は湿気が多くて、制御しているパソコンがすぐ故障するので、これまでに200万円もメンテナンス費用がかかっているんです」

筆者：「えっ！200万円もですか？」

課長：「ええ。導入してもう6年経って、償却は終わっているんですが、新しい機器を入れたからといって客足が増えるわけではないし、この施設で儲けるつもりもないので、まあ、しょうがないかって感じです。では、洗鉱場抗へ行きましょう」(「洗鉱場」とは、採掘した鉱石を水で洗いながら選別する場所をいう)

階段を下り、先程の分岐点まで戻り、今度は「洗鉱場抗」へ向かう。途中には、大人1人がやっと通れるぐらいの横穴がいくつもあり、「“小千畳鉱”この先、下方へ約25m、奥へ120mの小千畳鉱が伸びています」「“洗鉱場”この奥14m下りたところに鉱石を選別した洗鉱場が2カ所あります」などの説明書き(写真17)がある。途中が狭くて、そこへは行けないが、これにより網の目のように伸びる洞窟を想像することができ、さらに神秘性を感じる。欲を言うと、横穴の略図・イラストなどを示しておけば、もっとリアリティを感じることができたであろう。

洗鉱場抗へ到着すると、直径2mほどの池が出現する。水中ライトに照らされた水面は美しい(写真18)。

課長：「掘り出した鉱石を、この水で洗い出しながら選別していたんです。当時は電灯がないから、あのくぼんだところに燭台を置いて作業をしていたんですね」

指さす方を見ると、岩壁の一部が、四角く削られている(写真19)。

筆者：「なるほど。大変だったんですね。ところで、この水はすごく澄んでいますね」

課長：「そうですね。検査はしていませんが、



写真16：「鳴海の賛歌」のライトアップショー



写真17：横穴の説明書き



写真18：洗鉱場抗の池



写真19：燭台を置いていた穴



飲めるぐらいきれいだと思います。“黄金鉱”は以上です。次は、“大切坑”へ行きましょう。さあ出ましょう」

延べ100mほどの「黄金坑」であったが、荒々しい岩肌の坑道と親切な説明で、リアルに当時のことが想像できた。公開されている坑道が短くて、少し物足りなさが残ったが、次の“大切坑”に期待することにしよう。

「黄金坑」から出て、次はどこから入るのかキョロキョロしていると

課長：「“大切坑”は、この下の方にあります。では行きましょう」

筆者：（恐る恐る）「どれくらい歩きますか」

課長：「そうですね、10分ぐらいです」

筆者：「…行きましょう」

再び山道を一列になって下りていく。

[←前ページへ](#)

[次ページへ→](#)



空間
通信
[トップ](#)

マイパークシリーズ

5. 大切抗

ほとんど下り坂のため、歩き疲れることなく到着。ここも坑道入口の前に小さな休憩所（写真20）が設けられ、テント張りの砂金採取体験施設（写真21）も整備されている。

筆者：「あのテントが砂金採りの場所ですか。ここへ来た人のどれくらいの人が体験するんですか？」

課長：「そうですね、子供連れの方はほとんどやりますよ。全体で3分の1ぐらいですかね。1回200円と安いですから。採った砂金は小瓶に入れて持ち帰ることができます」

筆者：「砂金はここでとれたものを使っているんですか？」

課長：「いいえ。ここもまだ掘れば金は出ますが、コストを考えると…。そこで、カナダ産の砂金を使っています」

実は鳴海金山、朝日村が管理し、採掘権を所有している。今でも採掘が可能なのだが、人件費等のコストと産出量を比べると、再会しても採算が合わないらしい。

課長：「この“大切抗”は、鳴海金山の中でも一番下に坑口があるため、金山全体の水抜きとしての役割を果たしていました。そのため、ここからはあまり金を掘り出すことはなかった坑道です。しかし、明治の初めに、新しい採鉱法によって、可能な限りの金を掘り出すことに成功しました。その遺構が現在も残っているのです」

筆者：「ということは、“黄金抗”とは様子が違うのですか？」

課長：「そうです。先ほどの“黄金抗”のゴツゴツした岩肌ではなく、なめらかになっています。実際目で確かめてください。中は、少々狭いので、これを着けて下さい」

と渡されたのは頭頂部にいくつものスリ傷が付いているヘルメット（写真22）。まさに探検という雰囲気盛り上がり。全員が着用完了後、“黄金抗”より小規模だが、きれいに整備された入口（写真23）へと向かう。

中に入って10mも進むと、上下左右とも岩がなめらかに削られている（写真24）。天井のいたるところから水滴が落ちてくる。水抜き抗として活用されていた名残か、床の端には溝が掘ら

写真20：大切抗の休憩所



写真21：砂金採取体験施設



写真22：頭頂部の傷が気になるヘルメット



写真23：大切抗入坑口



写真24：上下左右ともなめらか。横には水路も

れ、水路として水が絶えず入口に向かって流れている。

奥へ進むにつれて天井は低くなり、ヘルメットがコツコツと当たり始めてくる。当然、腰をかかめて歩かなければならない(写真25)。ヘルメットの頭頂部だけの傷の原因はこれであったのだ。

途中には、床から1m程上に横穴がいくつもあり、「試掘坑」この先に金鉱脈があるかを探して、掘り進んだ坑道。岩の割れ目に沿って掘り進められたが、大きな金鉱脈には突き当たらなかったようである」と説明書き(写真26)がある。中には突き当たりが見えないほど深く掘り進んだ穴(写真27)もあり、「こんなに手掘りで進んで金鉱脈が見つからないときは悔しかったろうなあ」と少し感傷にふけりながら先へ進む。

100mも進むと、らせん階段(写真28)が現れ、順路が上へ向かう。やっと腰を伸ばし、狭い階段を上っていると、

課長：「登り切ると、もっと狭くなっていますから、注意して下さい」

筆者：「まだ狭くなるんですか？もう腰が痛いんです」

課長：「ガンバって下さい！」

などと励まされる始末。その言葉通り、ほとんど前屈みになって歩くぐらいの狭さになる(写真29)。しかし、地中探検という非日常行為が、楽しくて仕方がない。他の取材メンバーを見ても口では悲鳴を上げながら、顔は笑っている。

途中には、いくつか分かれ道があり、そこへ行ってみるとフェンスが張ってあり、行き止まりとなっている(写真30)。

課長：「この先は、さらに狭くなり、どれくらい奥まであるのかわからないので、立ち入り禁止なんです」

筆者：「このような未調査の洞窟はいくつもあるんですか？」

課長：「逆に解っている坑道がほんの一部と言った方がいいでしょう。現在も大学の学術調査は行われていますが、まだまだ全容は解明されていません」

1200年の歴史と規模に驚かされるのであった。そうして、30mほど進むと、再び下りのらせん階段が現れる。そこを下りると、先程通った坑道へ戻った。やっと腰を伸ばせたため、全員がため息をつき、腰をさすりながら、出口へ



写真25：だんだん狭くなってくる



写真26：試掘坑の説明書き



写真27：こんなに深い試掘坑も



写真28：らせん階段でやっと腰を伸ばす



写真29：ほとんど前屈みで前進

向かった。

全行程150mほどであったが、地中探検という趣で、非常に楽しい空間であるのと同時に、何も手を着けないありのままの掘削跡を見ることで、抗夫の苦勞と歴史の長さを感じることができた。

坑道を出て、休憩所で一休みしていると、

課長：「この下には、ここの水を使った洗鉢場跡もあるんですよ。ほら、草の影に少し見えるでしょう」

筆者：「え、どこですか？」

と少し下りていくと、坑道から流れる小川の先の草がボウボウに生い茂っている中に、丸い石造りの池が見える（写真31）。

筆者：「そこまで観光用に通路を造るとかしないんですか？」

課長：「そういう計画もあったんですが、自然保護のために、勝手に道も整備できないんですよ。本当は、“朝日スーパーライン”の入口から、それぞれの坑道へ車で行けるぐらいに道を整備して、お年寄りでも楽に来れるようにしたいんですがねえ...」

筆者：「うーん。でも個人的には、ここは自然を楽しみながら坑道観光もできるからこそ、魅力があるような気がします。逆に、坑道までの山道をハイキングコース的に、一周して帰ってこれるようにしたらいいかも知れませんね」

課長：「そうですね。予算のこともありますが、我々ももっと勉強して、この資源を生かして行きたいです」

観光課のお二人は、せっかく来たので、残って少し作業をするということで、取材班だけで山道を駐車場まで引き返す。

その約20分の山道は上り坂になるわけで、ご想像通り、運動不足の取材班全員がヘトヘトになったのは言うまでもない。



写真30：行き止まりの道も数多い



写真31：自然にさらされたままの洗鉢場跡



[前ページへ](#)

[次ページへ](#)



マイパークシリーズ

6. まとめ

朝日村は、村紹介のパンフレット（写真32）では「四季彩ゆたかな みどりの里」「人と自然とやすらぎのふるさと」などをキャッチフレーズとして、以下のような施設や観光名所を紹介している。

写真32：朝日村のパンフレット

**(1)みどりの里（道の駅「朝日」）**

朝日村体験交流センター／農山村生活体験室、郷土料理体験室、多目的ホール、休養・宿泊施設から構成される都市と農村の交流、村民の休養の施設

日本玩具歴史館／全国から収集した郷土玩具約35,000点を展示収蔵

またぎの家／奥三面ダム建設のために閉村した民家を移築した資料館

まほろば温泉ふれあいセンター／温泉センター

朝日きれい館／スパリゾート施設

ナーサリーガーデン／温泉熱を活用し、バイオ技術により生産された山野草、花、果実を展示販売

シルクフラワー製作工房／朝日村産の繭（マユ）を使った手作りシルクフラワー教室

物産会館／朝日村の産物、土産物の販売

(2)布部ヤナ場

清流三面川に仕掛けたヤナで捕れたアユを、その場で味わえる。

(3)ぶどうスキー場

標高800m、リフト2基、全長2kmのダウンヒルコース

(4)鈴ヶ滝

落差55m、幅10m、溪谷に爆風轟音が響き渡る日本の滝百選に選ばれた名所

(5)猿田川野営場

猿田川の清流と原生林に囲まれたキャンプ場&散策路

(6)二子島森林公園

三面ダム湖に浮かぶ二つの島と対岸の森林38haの広大な公園。オートキャンプ場あり。

(7)虚空蔵グリーンパーク

自然の地形をそのまま活かしたハイキングコース。遊歩道延長約5km。

(8)朝日スーパーライン

全長52km、山形県朝日村を結ぶ特定森林地域開発林道。沿線はブナの原生林をはじめ、全国水源の森百選地として森林浴や山菜採りの名所が多数

このように、自然を活用した施設や名所が多い中、朝日村の手による「ゴールドパーク鳴海」の紹介は、

—慶長時代、全国産金量の3分の1を産出した金山跡。高根の奥にあり、荒々しい岩肌が当時の作業の過酷さを物語っています。今、幻想の世界が「光と音」で繰り広げられます。—（原文のまま）

と記載されている。そして、場所を示す略図には「朝日スーパーライン」沿いに位置がプロットされている。これを見ると、気軽に行けると思ってしまうだろう。もしくは「細倉マインパーク」のように、整備された観光集客施設を想像するかもしれない。

しかし、現実には、厳しい。“観光”と銘打っているが、“探検”の方が妥当な表現だろう。お気軽な自然の散策気分で行くと、山道を進む段階でバテてしまい、引き返す者も出てしまうのではと心配になる。ぜひ、紹介文に「自然散策が楽しめる遊歩道ですが、山歩きに馴れていない人には、十分な運動不足解消になるでしょう」などの一文を入れていただきたい。

まだ比較する対象が「細倉マインパーク」しかないが、鉱山の遺跡として、関係のない造作や演出をしていない（一部あったが...）ここ「ゴールドパーク鳴海」の方が満足感がある。フィクションではない鉱山の歴史、作業の過酷さを体感できた。さらに、都会生活者の筆者には、坑道はもちろんだが、空に近く、風光明媚な深山の自然を散策する非日常体験も楽しめた。

自然を楽しむことをアピールすることも、集客的利点として考えられる。取材時にも簡単に提案させていただいたが、“自然散策+坑道探検”を前提に、歴史と自然を目の当たりにする社会体験の場として訴求できるだろう。もちろん、これは東京的な発想かも知れない。クルマを少々走らせると、十分な自然を堪能できるご当地周辺の人なら、坑道探検こそ最大のエンターテイメントになるのだろう。

つまり、ここの最大の魅力は、大自然は前提として、ありのままの坑道にある。あまりに人が来すぎても、自然破壊や、坑道内をより収容できるように整備されたりで、魅力が半減してしまうことも考えられる。ということは、自然・遺構の保護という観点からは、現状維持がベストのようにも感じる。

明治時代に閉山され、内部の全容が明らかになっていない神秘性。そして、本格的な整備ができず、坑道が短いというデメリットも、逆に秘境の探検気分を味わえる魅力に、相殺されている。何しろ、10月から5月までは、雪の中に姿を消しているのだから。

短い越後の春と夏、思い切りその息吹を感じる自然の中で、「ゴールドパーク鳴海」は、まさに我々に黄金郷の夢をかいま見せたのである。

最後に1つリクエストを言わせてもらおうと、駐車場に飲料の自動販売機を設置していただきたい！（帰りの上り山道はきつかった）

しかし、今度は飲み終わった容器のゴミ問題が出てきてしまうか・・・。

読者の皆さん、ここを訪れるときは、山歩きの準備をして、水筒持参でお願いしたい。

このような観光坑道が全国にまだあるのか、もっと違った工夫がされている施設があるのか、次のレポートに期待されたい。

[◀ 前ページへ](#)

[◀ ゴールドパーク鳴海TOPへ](#)

[マインパーク取材一覧▶](#)

